



私は現在、大阪と東京を拠点に仕事をしているが、生まれは松山市道後で、高校卒業まで松山で過ごした。故郷を離れて大阪大学に進学した一九七〇年代半ばは、まだ学生運動の余韻が残っており、教室の封鎖などで授業はしばしば中断を余儀なくされた。

その頃、友達から大阪の高校は学生紛争で荒れていると聞き、田舎の高校とはずいぶん違うなあと思いついたことが記憶に残っている。私の卒業した松山東高校では、みんな勉強や運動に明け暮っていて、私自身の政治的関心もゼロに近かったと思つた。

いつの頃から、校庭の安倍能成像に赤ペンキが塗られるという「事件」が起きたときも、化学の先生がペンキを落とすという思案するのをぼんやり眺めて

危機を好機に

ただけで、事件の意味がよく理解できなかった。今から思えば赤面するようなノンポリ学生だったわけだが、当時の松山にはそういうのんびりした学生が多かったように記憶している。

山内 直人



大阪大国際公共政策研究科教授

つと泥くさいもので、消費者政策、独占禁止政策、景気対策など、いやな政治や政策と向き合い、省庁間の縄張りのなかで格闘する日々が続いた。国土庁（現国土交通省）に出向して第四次全国総合開発計画（四全総）の作成に携わったこともある。八〇年代半ばのバブル経済のはしりの頃で、大型リゾート構想があちこちでぶち上げられた時代だ。日本の中でのふるさと愛媛の置かれた位置を客観的にみるよい機会だったと思うが、四国はどこも将来有望な基幹産業や大型プロジェクトが少なく、明るい将来像を描くのに

地域力試される岐路

父親の影響もあって大学では経済を勉強した。卒業時には石油ショック後の不況がまだ続いていたが、運よく経済企画庁（現内閣府）に就職できた。

霞が関で、われわれは官庁エコノミストと呼ばれていたが、実際の仕事はも

苦勞した記憶がある。

東京一極集中の是正や地方の振興などその当時の大きな政策課題は、バブル経済やその後の経済停滞を乗り越え二十年以上を経た現在でも、依然として大きな課題のままである。地域格差

ふるさと伝言

の是正は、言うはたやすいが一朝一夕には解決できない難問だ。

今年は、昨年来の世界的な金融危機と歴史的不況の大波を受けて試験の年になるというのは、衆目の一致するところだろう。また、総選挙の年でもあり、政治の世界でも政界再編含みの大きな変化が予想される。

このような激動のなかで、地方はこの試験をチャンスに変えて浮揚することができるとか、あるいは地盤沈下を続けるか、大きな岐路に立たされていると思う。こうした危機に瀕したときこそ、強いリーダーシップと政策構想力に裏打ちされた問題解決能力、すなわち「地域力」が試される。

故郷は遠きにおいて思うものというが、少し離れたところから眺めることによって、新しいアイデアを提案できるかもしれない。これから一年間、世界の中の日本、日本の中の愛媛という大きな視野を持って、日常生活から政治・経済に至るまでさまざまな問題をとり上げて考えてみたい。

（やまうち・なほと、松山市出身）